

# 愛が付くモノ

工業製品で頭に「愛」が付くのは「愛車」だけです…。あるTV番組におけるトヨタ自動車の豊田章男社長

の言葉だ。辞書で調べると「愛書」もあるが、これは読書好き（愛書家）の文脈であろう。「愛機」（愛用する写真機や飛行機）も辞書にあるが、今やカメラを愛機とは言うまい。飛行機や船の「愛機」「愛艇」はありだと思いが、愛車のセレブ版と整理したい。

なぜ車だけに愛が付くのか考えてみた。まず思い付くのは「顔性」。私を含め車好きの男は「車には顔があるから」とよく言う。人々は車を選ぶとき、機能だけでなく顔やスタイルも相当重視している。しかし、顔やスタイルがあるモノはいろいろある。大金を投じて購入するモノの代表は家だが、「愛家」とは言わず「マイホーム」。賃貸も多い中で自己所有することが貴重だからか？人形は顔があつて愛める対象だが、「愛人形」とは呼ばない。楽器は車に似て使い込むほど愛着が湧くが、「名

器。

そうなると、「愛が付くモノ」の条件は「動くこと」ではないか。家も人形も楽器も動かない。どんなに愛情を注いで育てても「愛花」「愛木」とは言わない。植物は動かないからだ。「愛が付くモノ」は、ある程度高価で人間対比相応の大きさで、使えば使うほどレスポンス（動き）が良くなる…。そんなモノだろう。そこまで考えてハタと思いついた。

最近復活したソニーのロボット犬「アイボ」がそれに近い！

これからのロボットは、AIの進化により限りなく「愛犬」「愛猫」に近いレスポンスをするだろう。飼主の表情や癖を学習して成長する。そういえばロボットが配偶者になる映画「アンドロイドNDRII4」があつた。「愛夫」だった…。モノに愛情を感じるためには、顔性よりも、人に対するレスポンスや人との相互作用の方が重要らしい。例えば、わが家の掃除ロボット「ルンバ」は、顔性はほとんどないが、

働きモノだし、ひもに絡まって立ち

往生している姿を見ると愛おしくなる。ヒト型ロボットの権威、大阪大学の石黒浩教授によれば、ロボットを愛おしいと感じるために、顔の具象性は必要ないそうだ。人の声を認識し言葉を返すさまざまなロボットでお年寄りの反応を試すと、具体的な子どもの顔は不人気。「孫に似てない」とむしろ嫌悪感を示されてしまう。かわいがられたのは、抽象的な顔のぬいぐるみだそうだ。ちゃんと対話できれば枕でもよいらしい。

「AIが人間の仕事を奪う」といった論調も目立つが、人口減少と高齢化が進む日本においては、AI搭載のロボットや機械、道具などは、人間の生活にとって非常に重要になるだろう。愛のあるAIは人間を助けてくれるはずだ。今、AIが付く製品は「スマート○○」と呼ばれる。近い将来、AIの性能が一段と向上し、日本の卓越したモノ作り技術と融合すれば、「愛が付くモノ」に進化できるに違いない。

照一隅

点々

